

句集

こうのとり

河嶋

こすもす



## 序

但馬の河嶋こすもすさんも又句集を出されることとなった。

彼女とのご縁は古く、ウェブサイト『ゴスペル俳句』がまだ現在ののようなオフライン活動ができなかったころ、メール句会の一員として熱心に支えて下さった。

但馬は、人と自然が豊かに共生できる素敵な郷であるが冬は豪雪との戦いでもある。介護士という大変なお仕事をやりくりして早朝に但馬を出発し、数時間かけて鉄道移動し関西の吟行に合流される。その熱意と努力は誰にも真似できない。

タイヤ痕なき晨朝の深雪道

ダンブカー満載の荷は捨てる雪

但馬地方はまた、コウノトリの野生復帰事業でも有名であることから、相談して彼女の句集名を『こうのとりの春』と決めた。

こうのとりの宝と守る郷の春

こうのとりの過ぎる但馬の青田空

人材不足を案じられる福祉事情にあつて介護士の仕事はとてもハードであつたと思う。努力して正式な資格も取得され介護士としてのお仕事を生涯の使命と考えておられた彼女から退職されるというお話をお聞きしたのは意外であつた。

退職の日の近づきし秋思かな

無事に円満退職の日を迎えられたという喜びと同時にいちまつの寂しさも漂うこの作品か

らは彼女の深い深い心の葛藤が汲み取れるのである。

退職されてからの彼女は、句会のスケジュールに合わせて関西在住のお嬢さん、お孫さん宅に移動され以前にもまして俳句ライフを楽しんでおられる。請われて介護のお手伝いをされる日もあるという。献身的なこすもすさんの生涯の上に、つづいて神様の豊かな祝福があるようにと祈って序のことばとしたい。

平成三〇年六月吉日

やまだみのる



每日句會入選句

曇天や谷戸の間遠にホトトギス

二月堂より遠望す青嶺かな

三世代揃ひて旅の菖蒲湯に



逆上がり繰り返す子へ花吹雪

梅林の小径数珠なす傘のれつ

連綿と但馬全山笑ひけり

時々  
はスイツチ  
入るる  
春炬燵

唄  
ひつつスキップ  
する子雛飾る

すつぽりとマイカー  
被ふ深雪かな

狼藉のごとき轍や雪の道

谷戸晴れて畝間畝間に薄氷

駅一つ過ぎて一面雪景色

靴跡は新聞配達雪の朝

帰り待つ程よくしみてぶり大根

ごみ拾ふボランテイヤ皆サンタ帽

マンシヨンの窓から声や焼芋屋

ゆつくりと回る風車や丘小春

葉牡丹の畝紅白に縞模様

鶏の庭かけめぐる小春かな

ついてくる電車の窓の後の月

野の花を活けて十五夜愛でにけり

橋桁に記す目盛りや水澄めり

夏草や本丸跡と一碑立つ

展望台涼し一湾パノラマに

山頂の紫陽花未だ色褪せず

フロントのお国訛りや避暑ホテル

ドクターへり雲の峰へと飛びたちぬ



パティシエの体験ツアー―避暑の旅

鹿の子の木陰に四肢を畳みをり

大甕の水満満と蓮開く

錦秋が莊嚴したる古墳かな

修道院祈りの道の石露明かり

古墳への小径彩る草紅葉

疎に密に休耕田の秋桜

石投げの三段跳びや秋の川

川風に吹かれ一服草紅葉

パプリカの赤が主役や夏料理

自動ドア開けばどつと蝉時雨

ベランダに水打つて風呼びにけり

地蔵堂手を合はせれば蟬時雨

泥つけしまま空蟬となりにけり

青田波二夕分けにして道ますぐ

グーの手の開けば青き梅ひとつ

洞窟の涼し柱状摂理また

読経めく左右の蛙田通夜帰り

洞窟の土間は常濡れ苔の花

懸かり藤愛でつつめぐる宮の杜

力士宿干せるまはしに春日燦

赤信号待ってゐる間の初音かな

鰈干しつつ後ろ手に蠅叩

宮参り祝ふがごとく梅日和



川舟の揺らぐ  
岸边や水温む

きんとんのついでに  
少し焼き芋も

クリスマス果てたる  
街に月冴ゆる

しりとりの中の途中で寝る子暖房車

おらが街にもクリスマススルミナリエ

末広の水脈を連ねて鴨進む

とびきりの笑顔でポーズ七五三

朝市をうろろ旅の秋惜しむ

コスモスの迷路辿れば力石

ウオーキングの影は脚長秋入日

幼子の質問攻めや夕端居

童心にかへる手花火旅の浜

甚平を着て園児らのおおはしやぎ

打ち水の露地に句会の余韻かな

参磴に雲なすごとく合歓の花

青竹で仕切る順路や濃あぢさる

ゴロゴロと牧草ロール牧のどか

風光る園駆けめぐる園児帽

花下の道デイスアービス車ゆつくりと

仏前の夫へも愛のチョコ供ふ

おぼつかぬ手つきの孫と雛飾る

雪折れに克ちて水仙花を挙ぐ

山伏も振り袖もゐる初電車

塩味の加減気遣ふ七日粥



一 駅 で 景 色 一 変 雪 野 原

吹 き 飛 ば す 眠 気 車 窓 の 紅 葉 山

水 琴 窟 金 の 鈴 ふ る 紅 葉 亭

古都めぐる女三代菊日和

ゆるキャラと握手し旅の秋惜しむ

天平の衣装体験古都の秋

退職の日の近づきし秋思かな

郵便受開ければ胡瓜五六本

白南風や組み立て進む浜の茶屋

館暑し文楽人形乱れ髪

車椅子押す人も又麦わら帽

林立す力士のぼりに風光る

新橋の渡り初めいま風光る

喝采の大道芸に風花す

ホルスタイン模様到庭の雪間かな

孫と手を繋ぎ買ひ物クリスマス

宿下駄を鳴らして雪の露天湯へ

吊し柿二階の窓を塞ぎけり

錦秋の嶺に白きは天文台

ガイドらは天平衣装古都の秋

松浜の木の間に縫ひて秋茜

介護士に盆休みなどなかりけり

大夕立やみたるあとの土匂ふ

奥院へ瀬音を辿る径涼し



梅雨空へコンビナートの炎燃ゆ

参道を狭め古刹の濃紫陽花

火の山の麓を埋むキャベツ畑

火の山の裾野に摘みし蓬かな

こうのとり宝と守る郷の春

老鶯の一声に覚む宿の朝

若布屑浮かぶ漁港の生け簀かな

雛飾り少女のこころ戻りけり

ひもすがら降りみ降らずみ春の雪

人見知り始まりし子に山笑ふ

タイヤ痕なき晨朝の深雪道

まず孫の顔見にゆかむ初電車

黒豆が主役わがやの御節かな

休みなきビニールハウス初明かり

注連縄の蝶ネクタイすポストかな

ご自由にどうぞと小玉柚子を盛る

凍てエンジン覚めよとお湯をかけてやる

孫誕生祝ふ赤飯今年米

水澄みて亀の浮沈のよく見ゆる

股覗きせる松浜の天高し

メダリストト迎へ祝福郷の秋

ロールパンめきて捻れし秋の雲

万灯の燭台並ぶ堂涼し

車椅子笑顔手振りで盆踊り



般若窟鎮座の聖天様涼し

頭上よりミスト涼しき花売り場

堂涼し八頭身の観音像

白南風に髪なびかせて朝散歩

澱みなき案内に巡る館涼し

武家屋敷名残の門や合歓の花

青田風山田錦の幟揺れ

裏山に飴す声は時鳥

背伸びして届く高さや袋掛け

老鶯の名調子聞く深山道

葉洩れ日のいまし日食映しけり

茅花流し池の漣絶ゆるなし

教会の窓にアンネの薔薇薫る

こどもの日初孫宿す娘と二人

屋上の東西南北山笑ふ

漣に揉まれ散らばる落花かな

雨風に翻弄さるる白木蓮

花束に添ふ吾が庭の小手毬も

春うらら力士の雪駄裾裁き

うららかや白寿の翁に表彰状

立ち並ぶ力士幟に風光る

すれ違ふ人皆会釈梅日和

四百年続く茶店の長火鉢

大家なる茅葺き屋根に風花す



軍手干すごとくに軒の干し大根

ダンブカー満載の荷は捨てる雪

臥す人と窓越しに見る雪景色

除雪車の信号無視をな咎めそ

こうのとり雪の田んぼに降り立ちぬ

ライトアップに燃ゆるは雪の明智城

残り火の瞬きをりしどんど跡

どんど焼き村の消防車も待機

吾を呼べる今川焼の匂ひかな

被災地へ届けと点す聖樹の灯

がんばろう日本と幟枯れ木中

朝一の道除雪車が先導す

ケーキ配るヘルパーらみなサンタ帽

粕汁の一椀に酔ふ下戸至福

晩酌のお口直しは美濃熟柿

利き酒の山田錦と納得す

雁の列一糸乱れず進みけり

隅櫓抱きて城山粧ひぬ

日本海へと雪崩なす芒原

ログハウス砦のごとく秋桜

山頂の城址に釣瓶落としの日

電子辞書座右としたる夜学かな

塩加減利く一口の栗ご飯

休耕田いまこすもすの花盛り



漁火の等間隔や沖の秋

同窓会久闊を叙す良夜かな

ハンググライダーいま中天や翳雲

浜茶屋の跡形もなく秋の風

新機種の電話に夢中秋灯下

内側は車椅子の輪盆踊り

ここのとり過ぎる但馬の青田空

ツバメの巣監視カメラの裏側に

石段の足音涼し僧の列

微かなる瀬音や紫陽花寺巡る

追ひ越されてもマイペース夏山路

瀬音して縦横無尽蛩とぶ

後しざりしつつ田植の進みけり

濯ぎ物干されし竿に玉葱も



# 定例句会入選句

木隠れに薔薇又薔薇や鳥語洩る

山師らの見え隠れする木の芽山

散りし梅水玉模様なせる磴



ひとしきり食べ方談義つくし摘む

覗き見る塀の死角に冬菜畑

たもとほる祈りの道の小春かな

カーブまたカーブ山上バス涼し

牧場のスタッツフ腰に蚊遣香

老鶯の聲が歓迎深山路

桜薬つもる坂道な滑りそ

Vサインしてももの芽出づ汀かな

カラフルになぞへ彩る散紅葉

四阿の四方より通ふ萩の風

境内に読経洩れくる萩日和

延命橋渡りしところ曼珠沙華

カラフルなヨットグッズや館涼し

展望閣眼下をよぎるつばくらめ

展望台眼下の街に風光る

天蓋の木々焦がさんととんど燃ゆ

黒焦げの榾木よこたふどんど跡

猪母子現れて行厨大騒ぎ

道をしへ忍者の如く失せにけり

六甲へ矢印の立つ滝の道

石畳隈なく埋む桜しべ

杉美林樹間に透ける山つつじ

初夢の友達はみな中学生

漣に大蓮右往左往かな



あだばえの朝顔宙に迷ひけり

寡黙なるボランティア女史汗しとど

気に入りの薔薇見つけてはハイポーズ

バラアーチ潜る笑顔の車椅子

着膨れて優先座席ゆづり合ふ

風花のこぼれ高舞ふアーケード

業平の歌碑おほひたる散紅葉

走り根の苔に珠なす秋時雨

夏野菜盛る自家製のスパゲティ

山並を写して植田展けけり

外つ国の漂流物や磯遊び

春愁や次のバスまで一時間

延命根撫づる遍路のご一行

教へあふ春スカーフの結び方

通天閣抽んでをる冬木立

漣の池に佇む秋日傘

句仇の松茸弁当句ひけり

急磴に訪ひし教会バラに満つ

お百度を踏む人の背に風光る

探梅の丘に届きし沖汽笛

号外が師走の街を席卷す

箱膳の並ぶ一間や白障子

振り絞るごとと細々と残る虫

パソコンを座右に灯下親しめり



春陽ざしへと直立す亀の首

とりどりの肥料袋や春田打

水音のジャズを奏づる里の春

尻押され売られゆく牛冬の朝

白波と見まがふ乱舞冬鷗

川舟の浮かぶ岸辺の草紅葉

旅の宿娘とおそろひの色浴衣

電柱が邪魔をしてをる遠花火

ダンプカー過ぎりて合歡の花揺るる

手づくりの皿に盛られし夏料理

新樹光ヤマトタケルの全身に

早苗田の風の漣絶ゆるなし

と見る間に舟虫岩に隠れけり

よく廻るペットボトルの風車

コンダクター踊るが如く春の曲

前髪の水滴となる春の雪

玄関に泥大根の並びをり

迷彩の模様  
に雪の残りけり

水平線大きくたはむ春の海

寒雀連鎖反応木から木へ





吟行句会入選句

ドンタツチ袋角への注意飛ぶ

釣り人に寄り添ひてまつ白日傘

欄干に押しくらをする寒雀

菊花展小学生らの作品も

緑さす休み処の野点傘

繋がれし古き小舟や池涼し

悉く寺苑を覆ふ若楓

瀬の樂に沿ひたる徑に秋惜しむ

灯火親し眼鏡たびたびずり落ちて

漣のごとくに揺るる芒原

ささやきの小径に恋の鹿屯

千枚田形さまざま風涼し

川沿ひに数珠なす駐車螢狩

をちこちの鳥語聞きつつ避暑散歩

湧きいづる如竹林に螢舞ふ

廃屋となりし茅葺き苔の花

幼帝の杜寧かれとさへづりぬ

大滝の落下の音の潔し

おにぎり  
を頬ばる  
吾に花吹雪

水音の程  
よきリズム  
花見船

すれ違ふ  
船に手を  
振る花見船



石ベンチ乾く間のなし梅雨の滝

神の滝ミストとなりてしづきけり

杉美林縫ふ深吉野の瀬の涼し

廃校の校庭の隅梅みのもる

猪来ると注意札立つ梅の苑

一色にあらず棚田の稲なびく

秋の蚊のあくびの口に飛び込みぬ

豊年の棚田に朝日さしわたり

展望の大和三山秋晴るる

展望台棚田へつるべ落しの日

蜘蛛の罟が揺りかごめける枯葉かな

近道はマムシ注意の札の立つ



## あとがき

不思議なご縁でウエブサイト『ゴスペル俳句』と出会い俳句をはじめました。遅々とした歩みながらも十五年の月日が経ち、まさか自分の句集が出来るなんて思いも寄りませんでしたから、ほんとうに嬉しいです。

主人亡きあと勤めはじめた会社が閉鎖となり介護施設で働くようになりました。慣れない介護の仕事は心身ともに疲れる毎日でしたが、俳句をしている間はそれを忘れて癒やしを得ることができました。生まれも育ちも但馬という私にとって月に一度の西宮の句会は都会の空気に触れる楽しい一時でもあったのです。

当時は二時間の句会に参加するために往復五、六時間かけて移動していましたが、娘が結

婚して奈良に住まいを構えてからは娘宅を基地として句会の前後を過ごさせてもらえるようになりました。これもまた俳句を続けてきたお陰と感謝しています。

俳句と関わることで得られた仲間との人間関係もまた私の宝物です。これからも生涯の友としての俳句ライフに励んでいきたいと思えます。最後になりましたが、身に余る序文を賜り句集について助言くださいました、やまだみのるさんに心から感謝し厚くお礼申し上げます。

平成三〇年六月吉日

河嶋　こすもす





『こうのとり』 河嶋こすもす句集

平成三〇年六月三〇日 印刷

平成三〇年六月三〇日 発行